

鳥城會會報 平成 22 年 6 月号特別版

注：東大副学長を務めておられる小島憲道さんに寄稿をお願いしましたところ、以下の
ような玉稿をいただきました。紙幅の関係で本紙に収容できないため、特別版とし
てお届けしました。(鳥城会事務局)

京都大学および東京大学における学生気質の昨今

小島憲道 (西高 19 回生・東京大学 理事・副学長)

私は 1994 年に学生時代から助教授まで過ごした京都大学理学部から東京大学教養学部に移り、2007 年度から 2008 年度まで教養学部長を務めました。鳥城会事務局から「昨今の大学生の気質」などについて随筆を依頼され、こうして筆をとっています。

私が京都大学理学部に入学した 1968 年は理学部にとって教育システムの大改革が行われた年でした。それ以前は、教養部から理学部専門課程に進学する際、物理学科など志望者が定員を超えている学科は 2 年生終了時に進学試験を行って選抜していましたが、大学紛争下の中、1968 年度から進学試験が撤廃され定員を超えても希望する学科に誰でも進学できるシステムに変わり、また自由で学際的な研究を行う人材を育てる理念から学科を越えたカリキュラム改革、必須科目の全廃という大胆な改革を行いました。学生は進学試験から解放され、1, 2 年生の時期から徹底した深い勉強を行う学生がいる半面、殆ど勉強しないで卒業していく学生もいて学士力という観点では余りにも幅が広がってしまいました。また、今では信じられないことですが、博士課程の大学院生は教員人事に参画した時代でしたので、科学者を目指す理学部の学生には武士のような雰囲気がありました。

このような学風の京都大学理学部で学生時代から助教授まで過ごしていましたが、大学院重点化を進めていた東京大学教養学部から誘いがありまして、1994 年に東京大学教養学部に移りました。東京大学では、新入生全員が駒場キャンパスで前期課程教育(1, 2 年生の教養教育)を受けた後、後期課程としての学部・学科を選ぶシステムを取っています。これは大学に入学してから様々な分野の最前線の情報に出会い、また幅広い教養を身につける中で、自分の適性を知り、自分の進路を選ぶことが重要であるという理念 (late specialization) に立って行なっているものです。前期課程から後期課程に進学する際、1, 2 年生の成績と学生の希望で進学先が決まるため殆どの学生は良く勉強します (勉強せざるを得ないというのが実情ですが)。この点が京大生と東大生の違うところで、京都大学ではクラスに試験対策委員など存在しませんでした。前期課程の東大生は進学振分けのためクラス単位で試験対策委員を決め、それぞれの教員の過去問題を調べ、定期試験に備えているのが現状です。

では東京大学の学生は全てが優秀かと言えば、決してそうではありません。何時の世にも驚くべき優秀な学生はいますが、東大に合格することが人生の最大の目的であった学生の中には、受験のために最大限の能力を使い果たした燃え尽き症候群の学生、親族等からの過大な期待が背負いきれない重荷となっている学生も存在し、社会の縮図を反映しています。

東京大学では、2009 年度に新しい執行部が発足し、私も理事・副学長として濱田総長を支える立場になりました。濱田総長から私に託された重要な任務の一つに「タフな東大生を育てる」という課題があります。どこまでも伸びてゆく優秀でタフな学生には、国際的に通用するリーダーとして育て、東大に合格することが人生の目的であった燃え尽き症候群の学生には束縛された背負いきれない重荷を解いて本来の力を発揮させ、標準的な多くの東大生には留学生との交流などを通して様々な価値の多様性に出会わせて偏差値という束縛された価値観から解放し、たくましい人材として社会に送り出したいと思っております。